

第 1 章

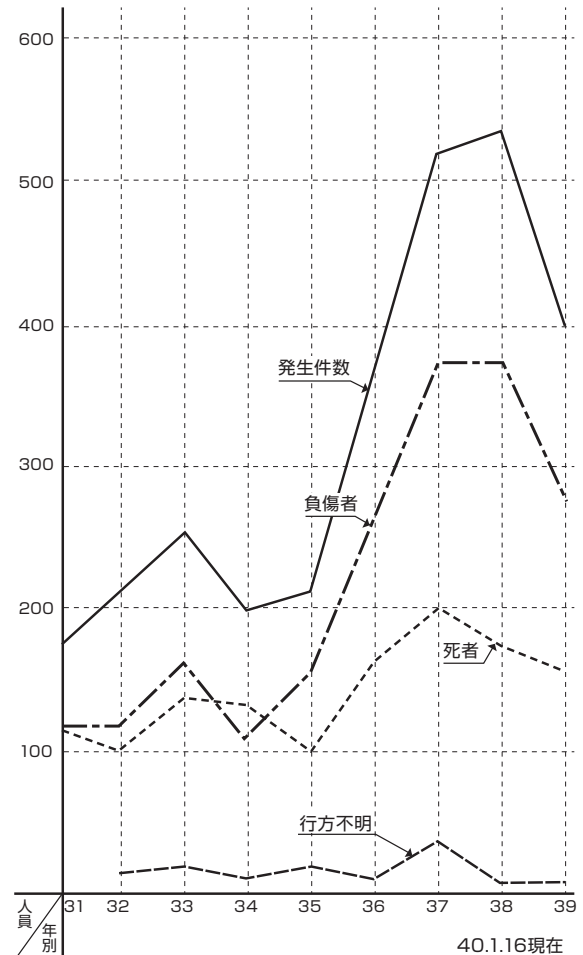
登山研修所開所と研修会への取組【昭和 42 年度～昭和 45 年度】

国土の 7 割を山と森が占める我が国では、古くから登山は時には鍛錬の場として、とりわけ山岳信仰の実践の場として人々に親しまれてきた。明治になって欧米の近代アルピニズム思想が伝えられ、明治 38 年には日本初の山岳団体として日本山岳会が誕生、以後、大学山岳部とその出身者を中心に意欲的な登山活動が実践された。しかし、その動きは、太平洋戦争への突入で完全に断ち切られた。

戦後、登山道具がない中で山を愛する人々は登山を復活させた。大きな刺激となったのが昭和 31 年、日本山岳隊のマナスル初登頂だった。この壮举の記録はカラー映画として日本中の映画館で上映され、多くの日本人が詰めかけた。マナスルに刺激されて登山人口が急速に増え、「登山ブーム」という言葉が初めて使われた。

昭和 37 年 12 月から昭和 38 年 1 月にかけて、のちに「サンパチ豪雪」と呼ばれる大雪による大遭難が相次いだ。大雪山縦走を目指していた北海道学芸大学函館分校山岳部の 11 名が遭難、リーダーを残して 10 名が死亡するという未曾有の惨事が発生。また、ほぼ同時期に富山県の折立峠から薬師岳の登頂に挑んだ愛知大学の 13 名がルートに迷って動けなくなり、全員死亡するという最悪の事態が起きた。これらの遭難は新聞などのメディアで繰り返し報道され、悲惨な山岳遭難事故を未然に防止するためには、優れた登山指導者の養成充実を図ることが急務として、昭和 39 年から諸外国の実

昭和31年～39年の山岳遭難事故の推移



昭和 41 年度概算要求説明資料（国立登山センター）に掲載の「昭和 31 年～39 年の山岳遭難事故の推移」（警察庁外勤課）



開所式で式辞を述べる文部省事務次官 福田繁



初代所長 井上一男

状を調査し、国立登山センターを設置する準備が文部省（当時）で始まった。

日本山岳協会など関係方面の協力を得て、研修施設の性格や規模、構想などを固めた。設置の場所については、数箇所の候補地の中から、初歩から高度な段階までの岩登りや雪上訓練、縦走訓練等ができ、また四季を通して訓練場所が豊富にあることから、富山地方鉄道立山駅にも近い立山町芦峯寺ブナ坂（千寿ヶ原）に研修所本館を置くこととした。昭和42年6月1日、文部省設置法施行規則の一部が改正され、この研修所の正式名称を「登山研修所」とし、スポーツ課の管理のもとに置かれること、所長を置くこと等が定められ、初代所長には、井上一男（文部省体育官）が就任した。また、「体育局長の求めに応じて、登山研修所の運営その他登山の指導技術の向上に関する事項について意見を提出し、及びこれらの事項について適宜助言するものとする。」を設置目的とした運営委員規則に基づき、昭和42年6月21日に榎有恒ら10名を運営委員に委嘱した。

続く昭和42年7月1日には、関係者約100名の参加を得て開所式を挙行了。式では、文部大臣式辞（福田繁文部省事務次官）、経過報告（赤石清悦体育局長）、祝辞（吉田實富山県知事、榎有恒日本山岳協会会長）、祝電披露、感謝状贈呈を行った。

高等学校登山指導者養成研修会（第1回）（昭和42年7月28日～8月4日）では、榎有恒が「登山とその指導について」というテーマで講義した。以後、浦松佐美太郎、今西錦司、梅棹忠夫、深田久弥、三田幸夫、村井米子といった時代を代表する登山家、学者ら錚々たる面々が立山を訪れ、研修参加者に対し、心に残る言葉を投げかけた。実技指導に第一線の優れたクライマーたちがあたってきたこととともにこれら講師の活躍がその後の研修所の充実発展に繋がった。

昭和43年6月には、年間計画の立案や研修要項及び指導書の作成、登山に関する技術、装備及び食糧、山岳遭難の事例（原因の調査とその対策）について調査研究をするために、登山研修所運営委員会に専門調査委員を置き、青木泰三ら20名を委嘱した。

研修事業としては、初年度である昭和42年度に、高等学校登山指導者養成研修会（夏山）をはじめ高等学校登山指導者積雪期研修会、大学山岳部リーダー研修会（夏山・冬山）、一般山岳団体指導者研修会（冬山）を始めた。

昭和43年度には一般山岳団体指導者冬山研修会、昭和44年度には女子登山指導者研修会、昭和45年度には集団登山指導者研修会を新たに始めた。

施設整備等の関係では、昭和43年2月に、積雪期の雷鳥沢、弥陀ヶ原、人津谷における研修会で負傷者が出た際に、迅速に搬送できるように雪上車「スノーキャット」を購入した。昭和43年10月には、劔岳周辺で実技研修をする春山・夏山研修会のベースキャンプとなる劔沢野営場の近くに、緊急避難先として、また、研修効果を高めるために夏山前進基地を竣工した。昭和44年12月には、夏山前進基地と同様の目的で、冬山前進基地を人津谷上部に竣工した。昭和46年3月にはロッククライミング訓練施設が完成し、同年5月8日に竣工式を挙行了。

調査・研究においては、昭和43年7月に、夏山研修会に共通する基本的な事項を取り上げた「夏山研修会テキスト（試案）」を、昭和44年2月に「春・冬山研修会テキスト（試案）」を作成した。その後に作成した研修要項（カリキュラム）に照らして、昭和45年4月にテキストの内容を再構成した「登山指導者研修会テキスト」を発行した。

～ 開所式における文部省体育局長の経過報告 ～

登山研修所の建設について今日までの経過を簡単にご報告いたします。

正しい登山を普及奨励し、悲惨な山岳遭難事故を未然に防止するためには、すぐれた登山指導者の養成充実をはかることが最大の急務であるとの見地から、そのための施設を設置する準備をはじめましたのは昭和 39 年春のことです。

この種の施設は我が国では初めてのものですので、フランス、スイス等の外国の施設の研究を行うとともに、この施設を設置する場所、規模などが最初の課題としてとりあげました。

幸い日本山岳協会など関係方面のかたがたのご協力を得まして、この研修所の性格、規模の構想もほぼ固まってまいり、また設置の場所については、ここ立山町千寿ヶ原が最も好適な場所として候補にあげられました。その結果直ちに関係の林野庁、厚生省はもちろん、地元富山県、立山町と折衝いたした所、きわめて理解あるご協力をいただき、この地に建設することに内定いたしました次第であります。

こうした準備を経た上で、昭和 40 年度予算に登山研修所の敷地購入並びに調査設計のための費用として、約 1,600 万円がはじめて計上され、正式に研修所建設の第一歩が踏み出されたのであります。

すなわち、敷地の測量は北日本測量株式会社、地盤調査はやまと地質調査株式会社がそれぞれ担当され、正確な資料を作成していただきました。研修所の設計は文部省教育施設部の指導の下に、株式会社石原建築設計事務所が担当し、現代的な鉄筋コンクリート造 3 階建て建物を設計していただきました。

昭和 41 年度は研修所建築のための予算として約 5,500 万円が計上されました。

建設工事は文部省教育施設部及び富山大学施設課監督のもとに佐藤工業株式会社が施工することになり、昭和 41 年 7 月 1 日起工式を挙行いたしました。

その後、立地条件、工期の制約等種々困難な条件があったにもかかわらず、昭和 42 年 1 月 31 日、無事完成をみる事ができたのであります。

この研修所は敷地面積約 26,000 平方メートル、建物は鉄筋コンクリート造り 3 階建、延総面積約 1,400 平方メートルであります。

宿泊定員は、講師、研修生を含めて 84 名、おもなる施設は宿泊施設のほか、研修室、食堂、浴室、事務室等でありまして、登山指導者の各種の研修に十分利用されうと思います。

昭和 42 年度は研修所の運営費、研修事業費、施設設備整備費の予算として約 4,100 万円が計上されるとともに、職員の定員は所長以下 7 名となっております。

登山研修所は当初、法律にもとづいた独立性のある機関とする構想で進めてまいりましたが、諸種の都合でその実現を見るに至らず小規模ながら、とりえず文部省体育局スポーツ課の一部として発足いたすことになった次第であります。

即ち昭和 42 年 6 月 1 日、文部省設置法施行規則の一部が改正され、この研修所の正式の名称を登山研修所とするともに、スポーツ課の管理のもとにおかれること、所長をおくこと等が定められ、この 6 月 1 日をもって発足いたしました次第です。

研修所の初代所長として井上一男体育官が発令され、創設事務の処理に努力をいたしております。

また、横先生を始め山岳関係の権威ある方々による 10 名の運営委員も決定いたしました。

以上のような経過をへて、本日開所の式典をとり行う運びとなりましたことはご同慶にたえないところであります。

ここにいたしますまで、関係方面の方々の御指導と富山県、立山町、富山大学をはじめ、関係各位の払われましたご協力はなみなみならぬものがあり、感謝の言葉もございません。

しかしながら、この登山研修所は当初の計画からみますと決して十分とは申せませんので、今後いっそう充実発展させる必要があろうかと存じます。

今後とも皆様のご協力とご指導をお願い申し上げて経過報告といたす次第です。

昭和 42 年 7 月 1 日 文部省体育局長 赤石清悦

初代運営委員の顔ぶれ

Topics

文部省体育局長の求めに応じて登山研修所の運営その他登山の指導技術の向上に関する事項について意見を提出し、また、これらの事項について適宜助言する運営委員会が設置された。運営委員には、山岳関係の権威ある方など次の10名（役職等は当時）が選ばれ、第1回運営委員会は、昭和42年7月1日の開所式の日に開催された。

槇有恒（日本山岳協会会長）（1894～1989年）
仙台市出身。1918～1921（大正7～10）年にかけてアメリカ、イギリス、スイスに留学し、アルプスでは1921（大正10）年にアイガー東山稜初登はんなどの足跡を残し、日本へ初めて本格的なアルプスの登山技術を実地に紹介した。1925（大正14）年には日本初の海外登山隊としてカナディアン・ロッキーのアルバータに隊長として遠征、全員登頂に成功。1956（昭和31）年には第3次マナスル登山隊隊長として日本人初の8,000 m峰初登頂に成功した。日本山岳会や日本山岳協会の会長を歴任。文化功労者。

加藤泰安（日本山岳協会常務理事）（1911～1983年）

東京出身。京大時代の1931（昭和6）年槍・西穂高冬季初縦走。1934～1938（昭和9～13）年にかけて白頭山、興安嶺、内蒙古の踏査探検を行う。戦後は1953（昭和28）年の第1次マナスル隊や1958（昭和33）年の京大隊のチョゴリザ、1962（昭和37）年のサルトロ・カンリなどの中心メンバーとして活躍。1963（昭和38）年にはニューギニアの中央高地へ登山・学術調査に出かけるなど、戦中戦後にかけて目覚ましい海外遠征の足跡を印す。

今西錦司（岐阜大学長）（1902～1992年）
京都出身。第3高等学校時代に山岳部を創立。京大時代、劔岳源次郎尾根やチンネ北壁で初登はんを成す。1930（昭和5）年、京都大学学士山岳会を結成。1935（昭和10）年1月白頭山の冬季初登。その後、内蒙古、大興安嶺などを探検。1952（昭和27）年、戦後初めてマナスル偵察隊でヒマラヤへ出かけ

る。1955（昭和30）年にはカラコルム探検に出かけ、ヒスパー氷河、ビアフォ氷河、バルトロ氷河などを踏査。1958（昭和33）年から類人猿を求めてアフリカ各地を調査するなど、我が国の登山・探検のパイオニアの一人。1979（昭和54）年、文化勲章を受章。

田中喜一郎（全国高等学校体育連盟会長）（1907～1990年）

東京出身。東京帝国大学文学部国文科卒、東京都立日比谷高等学校校長などを歴任。

深田久弥（作家）（1903～1971年）

石川県出身。白山山麓に育ち、小学生の頃から加賀越前の低山に登る。第1高等学校時代に本格的な登山に励み、東大時代も登山を続ける。東大卒業後、作家として『文学界』同人として活躍。『津軽の野づら』などの代表作を執筆。『日本百名山』は読売文学賞を受賞。戦前よりヒマラヤ研究に励み、『ヒマラヤの高峰』などを著し、自らも1958（昭和33）年にジュガル・ヒマラヤへ一人50万円で行くライト・エクスペディションを実践。

浦松佐美太郎（評論家）（1901～1981年）

東京出身。中学生の頃から登山を始める。1925（大正14）年、東京商科大学（現・一橋大）を卒業し、ロンドンに留学。滞欧中は「登山三昧」の生活を送り、1927（昭和2）年ツムット山稜からマッターホルン、プロモントアールからメイジュ、アイガー東山稜完登。1928（昭和3）年にはヴェッターホルン南西稜初登はんなど、40もの登頂を果たした。その後、評論家として活躍。

水野祥太郎（大阪大学教授）（1907～1984年）

神戸市出身。小・中学時代から毎早朝、六甲山地の再度山に登る。1925（大正14）年にRCC創立会員となり、槍・穂高・劔岳・錫杖などで岩登り技術を体系づけして『岩登り術』を集大成として出版（昭和8年発行）。この本はクライマーのバイブル的技術書となり、関西におけるカリスマ的

存在となる。また、『山野スキー教本』を著すなどオールベルク・スキー技術研究の権威。1970（昭和45）年にはP29登山隊隊長として初登頂に成功。医学博士。

牧野平五郎（富山県自然保護協会会長）
（1886～1972年）

富山市出身。中学時代に薬師岳登山。1923（大正12）年1月横有恒氏をリーダーとする立山の松尾峠遭難の遭難救助に尽力。1928（昭和3）年富山県体育協会の設立に併せて越中山岳会を創立。1948（昭和23）年には富山県山岳連盟を創立し、初代会長に就任。1962（昭和37）年には富山自然保護協会を設立され、立山の自然を守るために尽力。

塩谷敏幸（富山県教育委員会教育長）
（1919～1985年）

富山市出身。東京帝国大学文学部英文学科卒。富山市長（1983～1985年）などを歴任。

村井米子（女子登山家）（1901～1986年）
神奈川県出身。明治、大正時代に著述家として活躍した村井弦斎の長女として生まれ、1917（大正6）年16歳で富士山に登る。東京女子大学に入学後、益々自然に親しみ北アルプスをはじめとした全国の山々を跋涉した。1923（大正12）年には前穂高～槍を女性初縦走するなど、我が国の女性登山家の草分けとなった。1934～1943（昭和9～18）年までNHKの教養部ディレクターとして家庭番組の企画・制作を担当。
（尾形好雄）

開所前後の慌ただしさ

Topics

開所準備のため、昭和42年6月16日付けで採用されたのだが、それ以前の6月10日から出勤し、事務官の森井正、技官の扇谷義博と3名で、東京からトラックで次から次と送られてくる机、椅子、ベッド、毛布などの備品を各部屋へ配置する作業を開所まで毎日、最終電車が発車する午後8時頃まで行った。

最初に出勤した頃は電気、水道は通っていたが、水はパイプの中の油の臭いが強く、飲めるようになるまで1週間出し続けた。電話は立山駅2階の電話交換手へ申し込んだので使用だったので、本省等へ連絡するのに時間がかかった。本省から届いたコンロは、現在の家庭で使用されているものより小さく、火力が弱かったので、急いで石油コンロを発注した。

開所式当日は、いまだ玄関前が舗装されておら

ず、雨でぬかるみドロドロとしていたので、来賓等の出席者が靴を汚さず通れるようにベニア板やムシロを敷いて対応した。開所式直前、なんと、地下の重油タンクが油漏れを起こして残量が一滴もないことが判明した。これも急いで発注し、トラックで運ばれてきたドラム缶から大慌てで油を補助タンクに入れ間に合わせたものだった。

開所式が終われば研修会の準備である。7月28日から始まる最初の研修会高等学校登山指導者養成研修会（第1回）に間に合わせるため、テントやザイル、コンロなどの点検、不足している備品の発注等を大急ぎで行った。研修生への配布資料等はガリを切って謄写版で1枚1枚印刷しなければならず、多忙を極めた。
（佐伯正雪）



開所当時の事務室



昭和42年7月1日の開所式

1 高等学校・高等専門学校の登山指導者を対象とした研修会

この研修会は、高等学校や高等専門学校の登山部顧問等の指導者を対象に、登山に関する理論と実技について研修を行い、指導者としての資質を向上させることを目的としたものである。

(1) 高等学校・高等専門学校登山指導者夏山研修会

【研修時期・期間・場所】

第1期：7月下旬～8月上旬・8日間・登山研修所及び立山、大日岳、剣岳周辺

第2期：8月上旬・8日間・登山研修所及び立山、大日岳、剣岳周辺

【研修内容】

この研修会では、研修所において登山指導法、山岳気象、登山医学等の講義及び、雷鳥沢、剣岳周辺で雪上訓練、縦走訓練、確保訓練等の実技研修を行った。

【エピソード】

昭和42年度の第1回研修会は、開所間もない研修所が開催した最初の研修会であった。

昭和42年度の研修会は、7月28日から8日間の日程で開催し研修生32名が参加した。日本山岳協会会長の槇有恒による「登山とその指導」をテーマとした講義に始まり、「山岳気象（久米庸孝）」、「登山史（山崎安治）」、「登山医学と救急法（住吉仙也）」、「地形と地質（深井三郎）」、「リーダーシップと合宿（野村哲也）」、「登山の疲労と体力（小川新吉）」、「高校登山の問題点（徳久球雄）」と多様な講義を実施した。実技研修では3泊4日の日程で室堂へ入山し、雷鳥沢で幕営しながら剣岳、奥大日岳への縦走訓練、周辺の残雪を利用した雪上技術訓練、ザイルを用いた確保訓練を行った。

閉会式では、槇有恒が「よい天気です8日間の研修会が円滑に進み、立派な研修会であった。今後、

生徒を指導する場合、こういうことはどうであろうか？というようなことがあったら、昵懇となった講師の皆さんにご質問、ご意見を聞いてほしい。また、日本山岳協会、日本山岳会にもスタッフがいるので相談してほしい。個人的ではあるが久しぶりに楽しい登山をさせてもらった。所長をはじめ皆様にお礼を申し上げたい」と挨拶し、所長の井上一男が「8日間の研修会が無事終了して嬉しい。大きな成果をあげたと確信している。これは熱心にご指導いただいた講師の皆さんや熱心に受講いただいた先生方のお陰である。研修所最初の研修会ということで、実のところ不安であったが、先生方の意欲的な行動で心配事が吹っ飛んだ。研修所は、団体の研修の受入を考えているので、今後各団体の研修事業に利用してほしい。また、個人的に機会があれば立ち寄ってほしい。講師には、研修所の正しい発展のために目を開かせてほしい。また、要望があれば聞かせてほしい。先生方には今回の研修を契機に各々の学校においてより一層の指導の充実に努めてほしい」と挨拶している。槇有恒は講演だけでなく、研修生と一緒に入山し、行動を共にしながら幅広い指導を行った。

昭和45年度には、ヒラリー卿が来所し短時間ではあったが講演を行った。

この研修会は当初年間2回開催していたが、昭和45年度からは年間1回の開催となった。昭和44年



登山研修所最初の研修会(雷鳥平)【写真提供:株式会社日本経済新聞社】



談笑する槇有恒（美女平）

度からは、高等専門学校の指導者を対象とした高等専門学校登山指導者夏山研修会も同時に開催することとなり、昭和45年度には2つの研修会を統合し、高等学校・高等専門学校登山指導者研修会に名称を変更した。

【参加人数・主任講師】

この期間の平均参加者数は32名であった。最多は昭和45年度第1期の39名で、最少は昭和43年度第1期の25名だった。主任講師は、伊藤久行が2回、徳久球雄、山崎安治、中野満、野村哲也、梶本徳次郎が各1回担当した。



剋岳を目指して

【写真提供：株式会社日本経済新聞社】

ヒラリー卿の来所

Topics

エベレストに初登頂したエドモンド・ヒラリー卿一行が、昭和45年7月22日に登山研修所を訪れ、所内を視察した。その時に開催していた「昭和45年度高等学校・高等専門学校登山指導者夏山研修会」において講演を行った。その時の通訳は、研修会講師であった槇有恒が務めたのだが、彼はヨーロッパやアメリカでの留学経験が豊富だったため、その見事な通訳ぶりは研修生、講師

陣を驚かせた。

研修生の入山に合わせ、ヒラリー卿一行を登山研修所の大型バスで室堂まで送った。

また、平成3年11月12日にも、立山町立芦峠小学校とネパールのクムジュンスクールの姉妹校提携のイベントに参加するため来県したヒラリー卿一行は、登山研修所に寄りロッククライミング訓練施設などを視察した。



槇有恒らと共に雷鳥沢に入山したヒラリー卿



ヒラリー卿2度目の来所

夏山前進基地の竣工

Topics

登山指導者研修会の実施に際し、入山して実施訓練を行う場合、天候の急変に備えて安全性の確保と研修効果の向上を図るために、剣沢周辺に前進基地を建設することになった。当時の所長であった井上一男は、牧野平五郎（富山県自然保護協会会長）、若林啓之助（富山県山岳連盟副会長）、深井三郎（富山大学教授）、藤平彬文（清光女子高等学校講師）、佐伯利雄（内蔵助小屋経営者）、佐伯文蔵（剣沢小屋経営者）、志鷹光次郎（立山ガイド）、佐伯兵次（剣山荘経営者）の8名に、前進基地建設地選定の協力を依頼した。昭和43年4月16日と28日の2回、登山研修所で建設地選定の会議を開催し、6月1日と2日に建設予定地の剣沢キャンプ場で現地調査を実施して、建設地を現在の場所に選定した。

8月11日には剣沢の建設予定地で着工式を行い、10月23日に竣工した。建物は、自然の美観

を損なわないように配慮した設計となっている。

【夏山前進基地】

所在地：立山町芦峯寺ブナ坂外11 国有林123イ林小班（剣沢）
（中部山岳国立公園特別保護地区、立山鳥獣特別保護地区、特別名勝及び特別記念物指定地内）

標高：2,450 m 建物面積：154 m²
敷地面積：725 m² 構造：鉄骨羽板平小屋建
収容人員：60名



建設中の前進基地



竣工当時の前進基地（正面入口）

(2) 高等学校・高等専門学校登山指導者冬山研修会

【研修時期・期間・場所】

2月上旬～2月中旬・8日間・登山研修所及び千石前進基地、早乙女岳周辺

【研修内容】

研修期間は8日間で、研修所での座学等を4日間、入山して行う実技研修を4日間行った。実技研修では人津谷、前大日岳周辺に入山し、歩行技術（スキーによるラッセル、わかんじきによるラッセル、アイゼン歩行）、生活技術（雪洞、イグルーの構築及び

生活の仕方、立木の切り方及び焚き火の仕方）、雪上確保技術（ピッケル、わかんじき、ザイル等の使用による確保）、スキー技術、危急時対策、ルート・デポ旗の使用方法等について研修した。座学として「学校教育と登山」をテーマとした講演、「冬山における救急法」、「冬山気象と雪崩」に関する講義、「クラブ指導の年間計画」についての自由研究等を実施した。



前進基地に到着

【エピソード】

昭和44年9月には、千石の冬山前進基地が完成したことで入山中の講義や研究討議も可能となり、冬山研修会はより充実したものとなった。また、緊急時の避難場所としても活用できることから研修会の安全性も向上した。

昭和45年度に実施した深田久弥の講演は、実体験に基づいた説得力のあるもので研修生は熱心に聴講していた。想定遭難救助訓練では、下山の際に骨折者が出たという想定でスキーを利用した負傷者の搬出訓練を行った。研修生は負傷者の搬出がどれほど困難なものか、身をもって知ることができた。



ラッセル訓練（前大日岳）

昭和42年度研修会の名称は、高等学校登山指導者積雪期研修会であったが、昭和43年度以降は高等学校登山指導者冬山研修会とした。昭和44年度は高等専門学校登山指導者冬山研修会も同時に開催した。昭和45年度以降は高等学校・高等専門学校登山指導者冬山研修会とした。

【参加人数・主任講師】

この期間の平均参加者数は36名だった。最多は昭和42年度の45名で、最少は昭和45年度の31名だった。主任講師は、山崎安治、中野満、速水潔、石坂久忠が各1回担当した。

(3) 高等学校・高等専門学校登山指導者春山研修会

【研修時期・期間・場所】

5月下旬～6月上旬・8日間・登山研修所及び雷鳥沢周辺

【研修内容】

研修期間は8日間で、実技研修として雷鳥沢野営



雪上訓練（雷鳥沢）



スキー訓練に向かう研修生（雷鳥平）

る講義、自由研究、研究協議、反省会等を実施した。

【エピソード】

昭和44年度には、実技研修に重点をおくため実技期間を1日増やし5日間とした。この研修会から春山スキーを取り入れ春山登山技術と合わせて指導した。

昭和45年度からは、高校（夏山・冬山）と同様に高等専門学校教職員も対象とし、研修会の名称を高

等学校・高等専門学校登山指導者春山研修会とした。

【参加人数・主任講師】

この期間の平均参加者数は25名だった。最多は昭和45年度の28名で、最少は昭和44年度の22名だった。主任講師は、徳久球雄、松永敏郎、沢入保忠が各1回担当した。

雪上車「スノーキャット」の活躍

Topics

昭和43年2月、四輪駆動のキャタピラを持ったカナダ製の雪上車「スノーキャット」を購入した。冬山研修会で負傷者がした場合に迅速に搬送できるようにするためのもので、日本では富士山で使用されていたものに続き、2台目の導入であった。昭和44年からの3年間は、11月下旬に雷鳥沢周辺で開催した大学山岳部リーダー冬山研修会で使うため、雪上車をケーブルカーの貨車に乗せて立山駅から美女平まで運び、そこからは雪上を走行して天狗平に向かい、研修会中はそこで待機させた。また、2月、3月に人津谷、大日岳周辺で開催した冬山研修会では、研修生が研修所から人津谷の造林小屋まで深雪をラッセルせず効率良く入山することができるように、入山前日にはこの雪上車で圧雪した。斜面を圧雪するときに雪上車が横転するおそれがあるため、斜面をスコップでカットする作業補助員を芦峠寺の2名にお願いし、作業を進めた。

昭和45年11月には、同志社大学スキー部が地獄谷房治荘から下山中、吹雪に巻き込まれて、11名のうち7名が行方不明となる遭難事故があっ



作業補助員と共に進む雪上車（人津谷）



走行能力が高かった四輪駆動のキャタピラ

た。その時に、大雪で孤立した弥陀ヶ原ホテル、立山荘の従業員救出の協力要請があったので、すぐに雪上車を走らせ、桂台から美女平の自動車道を通って弥陀ヶ原へ向かった。当時の立山開発株式会社の雪上車は、雪上走行能力がなく上子平までしか行くことができなかったが、「スノーキャット」は四輪駆動の威力を見事なまでに発揮して弥陀ヶ原まで余裕をもって進むことができた。孤立していた弥陀ヶ原ホテルと立山荘の従業員を救助するため桑谷まで2往復したのだが、両支配人には大変感謝された。

昭和50年まで、冬季の間は千寿ヶ原にはブルドーザーが入れず、道路の除雪は行われていなかった。このため、降雪時には「スノーキャット」で研修所から立山駅、千寿ヶ原地内の道路を圧雪し、研修生や地域住人が移動しやすくなった。

大いに威力を発揮した雪上車だったが、導入後十数年経た頃には部品を取り扱う業者がなくなり、車輛の整備が十分にできなくなった。平成6年頃までは研修所内のスキー研修場所としていた裏山を圧雪することに使用していたが、平成11年に廃車とした。

（佐伯正雪）



建設中の前進基地

剣沢で昭和43年10月に竣工した夏山前進基地と同様に、天候の急変に備えるとともに、研修会での研修効果を高めるため、冬山前進基地を人津谷上部の上市町千石に建設することとなった。

冬山前進基地建設予定地選定協力者としては、牧野平五郎（富山県自然保護協会会長）、若林啓之助（富山県山岳連盟副会長）、深井三郎（富山大学教授）、藤平彬文（清光女子高等学校講師）、二川卯吉（富山県保健体育課長）、白山正（富山県貿易観光課長）、山本琢郎（富山営林署長）、中田治重（立山町長）、

志鷹久六（芦峯寺区長）、佐伯利雄（内蔵助小屋経営者）の10名が就いた。昭和43年11月6日に建設地選定会議が開催され、昭和44年2月24日と25日には、人津谷上部建設予定地を現地調査し、同年9月3日、登山研修所で着工式を挙行了した。

建設準備期間中は、8月11日の集中豪雨により、県道立山公園線の千寿ヶ原、桂台間が寸断され工事が一時中止したものの、昭和44年11月29日、予定通りに竣工した。竣工当初は、飲料水については雨水に頼らず沢水（雪溪の水）を採ることができるようになっていた。

【冬山前進基地】

所在地：上市町大字千石字南無阿弥陀外4国有林
136ろ林小班（人津谷上部の鞍部）（千石）

標高：1,310 m

敷地面積：550 m²

建物面積：169 m²

構造：鉄骨2階建

収容人員：70名



竣工した前進基地

ロッククライミング訓練施設（人工岩場）の建設

Topics



建設中の人工岩場

登山研修所のロッククライミング訓練施設は、本体の四角錐台（高さ15m、縦11m、横13m；頂部3×5m）が、鉄筋コンクリート造で、その表面にコンクリートまたは石積みで凸部をつくり、セメント

モルタルの吹き付けを行って成形したもので、独立の人工岩場としては本邦初のものであった。

昭和47年7月発行の利用の手引きには、建設の趣旨について「岩登りの技術は、他の技術と同様に、正しい知識と繰り返し行われる実技の訓練によってのみ、はじめて実際に役立つものがつかわれるものである。実際には、岩場までのアプローチ、岩の状態（岩質・落石・乾湿）、天候、指導のしやすさなどの面で、訓練を実施するのに適当な岩場を求めることは、はなはだ難しい。研修所では、これらの点を考慮し、基本的な岩登り技術の研修および登はん用具の強靱度・耐久度のテストならびに新たに開発された用具の実験等が、より有効におこなわれるようなロッククライミング訓練施設を設置した」と記載している。

昭和45年3月から6月、合計5回にわたって



壁面の仕上げに携わった協力者

検討委員会を開催した。油粘土模型を作成し壁面構成について具体的な検討を行うなど、施設の使用目的、使用条件、施行方法、各面の勾配及びハーケン数、壁面構成についての基本構想をまとめた。

壁面の仕上げであるモルタル吹き付け作業には、現場指導協力者として地元の富山県山岳連盟から、石坂久忠、井上晃、浦浜幸一、木戸繁良、佐伯郁夫、佐伯邦夫、高塚武由、浜田文二、若林啓之助が参加した。

作業に携わった高塚武由は、「高橋定昌をリーダーに、湯浅道男らが、2週間研修所に泊まり込み、自炊しながら仕上げた。実際の岩場に近づけるためにコンクリート吹き付けをいろいろと工夫しながら行った」と語っている。

昭和46年4月23日にロッククライミング訓練施設試登会開催、5月8日に竣工式挙行、翌年7月に「ロッククライミング訓練施設利用の手引き」を発行（B5版11ページ）した。

【ロッククライミング訓練施設の建設検討会】

（委員）澤村幸蔵、高橋定昌、中野満、宮下秀樹、山崎安治、徳久球雄、湯浅道男、文部省工営課・用度班担当官、ハガネ設計事務所担当者



モルタルの吹き付け作業

2 大学山岳部のリーダーを対象とした研修会

この研修会は、大学山岳部のリーダーを対象に登山に関する基礎的知識と実技について研修を行い、リーダーとしての資質を向上させることを目的としたものである。

(1) 大学山岳部リーダー夏山研修会

【研修時期・期間・場所】

8月下旬～9月上旬・8日間・登山研修所及び剱沢周辺

【研修内容】

研修期間は8日間であり、剱沢周辺で3泊4日の実技研修を行った。平蔵谷や長次郎谷において雪渓上のルート選定と歩行技術、別山北面や剱御前南面において岩場の登はん技術、ガレ場のルート選定に関する研修を実施した。他の実技研修項目としては、救助訓練、読図、気象観測、生活技術、幕営技術等があった。研修所では講演、講義、自由研究、研究協議等を行った。

【エピソード】

昭和42年度の第1回研修会では講師の堀田弥一が、第2回研修会では谷口現吉が「リーダーシップ」をテーマにパネルディスカッションを行った。昭和43年度の報告書には、「第1回、第2回を通じて、各大学には各伝統があり、リーダー会により独自に指導しているので統一した技術を研修することは難しかった」と指導の難しさが記載されている。

昭和44年度第1回研修会（8月19日から同月26日に開催予定であった）は、北陸地方の集中豪雨による災害のため、富山地方鉄道立山線、県道立山公園線が不通、千寿ヶ原が孤立状態となり、8月14日になっても復旧の見通しがつかず、水道も断水し、食糧の買い出しが不可能となったため研修会を中止した。



講義室に集まった研修生

昭和45年度の研修会では、夜間に夏山前進基地を利用して「事故発生時における判断・処置・連絡」、「荒天・雷などにおける判断」、「海外登山の回想」をテーマに講師から話を聞く機会を設けた。いずれの講話も講師の実践に裏打ちされたもので、研修生に大きな感銘を与えた。

【参加人数・主任講師】

この期間の平均参加者数は42名だった。最多は昭和42年度第2期の58名で、最少は昭和44年度第2期の27名だった。主任講師は、村木潤次郎が2回、金坂一郎、山崎安治、川上隆、宮下秀樹が各1回担当した。また、運営委員の今西錦司、浦松佐美太郎が講演を担当した。



岩場での訓練

昭和44年の大水害

Topics

昭和44年8月8日夜半から12日朝にかけ、芦峯寺は驚異的な集中豪雨に見舞われた。特に10日から11日の短期間で急激に雨量が増加し、立山カルデラ内、水谷の日雨量は、8月10日で280 mm、11日で329 mmに達する記録的な豪雨となった。このため、常願寺川をはじめ、県内にある多くの河川が氾濫し、橋の流失や堤防の決壊など大被害をもたらした。

研修所付近では、8月11日、まず称名川を挟んだ対岸にある岩場の大崩落を皮切りに、清流荘、ガソリンスタンド、称名発電所の社宅など藤橋地域の建造物や称名川に架かる藤橋が流された。道路も至る所で寸断された。また、真川に架かる富山地方鉄道の鉄橋も甚大な被害を受けた。このため、県道立山公園線と富山地方鉄道立山線が不通となった。

研修所の建物には直接の被害はなかったが、上水道が断水したため、立山消防署から消防ホースを借り、水源地から水を引いて貯水タンクへ入れた。断水の復旧までは1週間ほどかかった。

このときの集中豪雨によって流失した大量の土砂が称名溪谷を埋め、それまでの美しい杉林の溪谷は、その姿が一変した。現在、研修所から下りた所は、「立山1号公園」として整備されている。

この集中豪雨の期間に一般山岳団体指導者夏山研修会を開催していたが、入山することもできず、



富山地方鉄道立山線の甚大な被害

食糧調達の見通しも立たなくなったため、7日間の研修会を4日間で打ち切って解散した。その後に予定されていた大学山岳部リーダー夏山研修会は中止とした。

このとき、千石では冬山前進基地を建設準備中であったが、そこで働く人たちは集中豪雨の大被害のことを知らずに作業を続け、お盆に下山した際に人津谷、称名川の大変貌に愕然とした。



崩落する対岸の斜面

(2) 大学山岳部リーダー冬山研修会

【研修時期・期間・場所】

第1期：11月下旬・8日間・登山研修所及び雷鳥沢周辺

第2期：3月上旬・8日間・登山研修所及び人津谷、千石前進基地周辺

【研修内容】

この研修会は11月下旬と3月上旬の年間2回開催した。11月下旬には雷鳥沢周辺、3月上旬には人津谷、前大日岳周辺をフィールドとして研修会を行った。

研修期間は8日間であり、実技研修として雷鳥沢幕営場（11月下旬）、または、人津谷造林小屋（3月上旬）を拠点に3泊4日の研修を行った。研修内容は歩行訓練、スキー技術訓練、氷雪技術訓練、救急法、負傷者の搬送等であった。実技研修の前後2日間は研修所を拠点に講演、講義、研究討議、自由研究、反省会等の座学を実施した。

【エピソード】

初回の研修会は昭和42年度に大学山岳部リーダー積雪期研修会の名称で3月10日から開催した。翌年には名称を大学山岳部リーダー冬山研修会に変更



スキーでの登高（人津谷）



わかんじきの履き方の研修

し、11月下旬と3月上旬の年間2回開催とした。

昭和44年11月20日から開催した研修会では、雷鳥沢周辺での実技研修中に猛吹雪のため高原バスが不通になり、予定日に下山することができなくなった。研修生は地獄谷房治荘に避難し、翌日には全員が無事下山している。当時の報告書には「参加者にとっては、この豪雪により冬山の厳しさを再認識させられ、深雪のラッセル技術訓練のよい機会でもあった。今回、スキー技術訓練を主体として、実技を実施したが、大学山岳部のスキー軽視の風潮を打破するのに多大な貢献をしたものと思う」と記録されている。また、この研修会には定員を上回る64大学99名の参加申込があり60名の参加を承認した。これは、同年の夏山研修会の参加者が27名と少なかったため募集通知を大学宛だけでなく、山岳部宛にも送ったことで参加申込が増加したものと思われる。

【参加人数・主任講師】

この期間の平均参加者数は46名だった。最多は昭和44年度第2期の56名で、最少は昭和42年度の23名だった。主任講師は、芳野赳夫と斎藤惇生が各2回、橋本誠二、栗林一路が各1回担当した。

3 一般山岳団体の指導者を対象とした研修会

この研修会は、一般山岳団体のリーダーを対象に登山に関する基礎的知識と実技について研修を行い、リーダーとしての資質を向上させることを目的としたものである。

(1) 一般山岳団体指導者夏山研修会

【研修時期・期間・場所】

7月下旬～8月上旬・7日間・登山研修所及び剣沢周辺

【研修内容】

この研修会の研修期間は7日間であり、剣沢を拠点に実技研修を行った。長次郎谷や平蔵谷では「氷河、



前進基地前での指導



準備体操

雪溪の状態とルートの取り方」、「初心者に対する雪上歩行の指導法」、「急斜面の雪溪における技術指導」、「初心者に対するグリセードの指導法」等の研修を行い、ハツ峰や源次郎尾根、別山では、「制動確保の理論と実際」、「リーダーとして岩登りを指導する際の安全対策」、「岩登りの基礎訓練の順序」等の研修を実施した。

研修生のレベルは全般的に高く、ハイレベルの者には指導法を中心に、他の者には技術訓練を中心に研修を行った。

【エピソード】

この研修会の初めての開催は昭和43年度であった。昭和44年度は集中豪雨のため剣沢へ入山することができなかった。研修所内でザイル操作、三つの道具（ハーケン、カラビナ、ハンマー）の安全な使い方、救急法、担架の作り方等、限られた内容の研修を実施した。千寿ヶ原へ通ずる笛山地方鉄道立山線、県道

立山公園線も不通になり、食糧調達の見通しも立たなくなったため、7日間の研修会を4日間で打ち切った。

この研修会は主に社会人を対象とする研修会のため、参加者の確保が難しかった。昭和45年度の報告書には「参加申込者28名、実際の参加者21名で意外なほど少なかった。7名の不参加者は、ほとんどが勤務先の都合であるが、会社などに勤務する者にとっては1週間の休みをとるのはたいへん困難なようである。また、所属山岳会の合宿の時期でもあり、一層参加者が少なかったようである。開催時期を再検討したい」と記されている。

【参加人数・主任講師】

昭和43年度から昭和45年度の平均参加者数は23名であった。最多は昭和43年度の25名で、最少は昭和45年度の21名だった。主任講師は伊藤久行が1回、澤村幸蔵が2回担当した。

(2) 一般山岳団体指導者（積雪期・冬山）研修会

【研修時期・期間・場所】

2月下旬・7日間・登山研修所及び人津谷、前大日岳周辺

【研修内容】

この研修会の研修期間は7日間であり、4泊5日の日程で人津谷、前大日岳方面に入山して実技研修を行った。わかんじきによる歩行方法（ラッセルの仕方）、スキーによる登山技術（ラッセルの交代法、休憩のとり方、キックターン、ルートの取り方とルート旗の立て方、スキーデポの仕方）、雪上での確保技術（コンテナス及びスタカットにおける確保）、滑落停止技術、雪洞の構築と幕営技術、生活技術等



雪中での幕営

の研修を実施した。実技研修の前後には、研修所で講演、講義、研究協議を行っている。



研修所スキー場での研修

【エピソード】

初回は昭和 42 年度に開催した。一般山岳団体指導者積雪期研修会の名称で開催し、各都道府県の代表 41 名が参加した。この研修会が研修所開所後に冬山で行われる最初の研修会であった。この時の研修会には、後に研修所の主任講師、講師になる出堀宏明（岩手県）、荘司明夫（秋田県）、平田恒雄（広島県）が参加していた。出堀宏明は「登山研修 Vol.13」で「研修所について驚いたことは、コーチ陣が充実しているこ

とであった。講義は楨有恒先生と加藤泰安先生、実技は当時「山と溪谷」や「岳人」でも活躍していた梶本徳次郎氏、阿部和行氏、金坂一郎氏等そうそうたるメンバーで、自信過剰な私も初心に返って学んだ。研修生も各県からのトップバッターで、各班むんむんと熱気が感じられる有意義な研修会でした」と記している。

昭和 44 年度には、前年に竣工した冬山前進基地を活用して、3泊4日の日程で実技研修を行った。

昭和 45 年度の研修会では、2 月としては予期しない降雨に遭い、雨具の用意のない多くの者はずぶ濡れとなり「2 月の山でも雨が降る」ということを改めて研修生に認識させた。

【参加人数・主任講師】

この期間の平均参加者数は 32 名だった。最多は昭和 42 年度の 41 名で、最少は昭和 45 年度の 27 名だった。主任講師は、梶本徳次郎と伊藤久行が各 1 回、中野満が 2 回担当した。

4 女子登山指導者を対象とした研修会

この研修会は女子登山指導者を対象に、登山に関する基礎知識と実技について研修を行い指導者としての資質を向上させることを目的としたものである。

女子登山指導者研修会



女子研修生

【研修時期・期間・場所】

8 月中旬、9 月下旬・4 日間、7 日間・登山研修所及び劔岳周辺

【研修内容】

昭和 44 年度に、社団法人日本山岳会と共同主催で 4 日間の日程で開催した。研修所では座学として様々な講義を行い、劔沢に入山してザイルの使用方法、劔岳往復、長尾梯夫による「登山の医学について」



雪上訓練（劔沢）

の講義等の研修を行った。入山中の講義と宿泊は夏山前進基地を使用した。

【エピソード】

昭和 45 年度は登山研修所単独の主催事業として 7 日間の日程で開催した。主任講師山崎安治のもと副主任講師に男性講師 5 名を配置し、8 名の女性講師が 8 つの班を担当し指導にあたった。劔沢入山中に台風の影響で瞬間最大風速 35 m の暴風雨にみま

われたが、講師と研修生で協力してテントを守り抜いた。その間、絶えず夏山前進基地の本部とテント内の講師はトランシーバーで交信を続け、危険が迫れば直ちに研修生を前進基地に避難させる体制を整えていた。

【参加人数・主任講師】

この期間の平均参加者は38名だった。最多は昭和44年度の43名、最少は昭和45年度の33名だった。主任講師は村木潤次郎と山崎安治が各1回担当した。

初めての女子研修会開催

Topics

昭和44年9月20日～23日の4日間「女子登山指導者研修会」が開催された。女性のみを対象とした初めての試みとなる本研修会は、日本山岳会婦人懇談会との共同主催として、講師23名、研修所職員2名、参加者43名の総勢68名が参加。第一次登山ブームを背景に予想を超える90名以上の申し込みがあり先着順で59名を受け入れたが、直前に起きた親不知の土砂崩れによって16名が不参加となった。1日目に榎有恒、村井米子、山崎安治、村木潤次郎、長尾悌夫らによる講義を実施。2日目～4日目は夏山前進基地をベースに9班に分かれて歩行・登はん・生活技術・危急時対策の実技講習が行われ、3日目には2チームに別れて平蔵谷と別山尾根から剣岳を往復した。具体的な内容をみると、指導者やリーダーという立場を念頭に置いたものであり、歩行や休憩の取り方や判断、岩や登はんルート判断、天候判断、危急時の対処方法などであった。なかでも、机上講習で行われた「登山の指導について（榎有恒）」「女子登山の変遷（村井米子）」「女子登山の現状と今後の方向（山崎安治）」「リーダーシップについて（村木潤次郎）」などの講義は当時の第一線

である立場からの提言であり、これだけの講師陣を集めることができたことは、歴史的にみても価値の高い特筆すべきものである。本研修会は女子を対象とした初の試みということで、企画当初は参加者数がつかめ



雪上でのロープワーク

なかったために「18歳以上で3年以上の経験を有する女子」として自由参加の形がとられたが、結果的には20歳～40歳代までの学生・社会人・主婦と多様性に富み、一方で各人の経験や能力にかなりの差があった。女性のみを対象とした研修会は、時代的な要望の高まりに合わせての初の実施であったが、許容範囲上限での受け入れとなるほどの盛況であり、研修生や講師ともに終始意欲的な研修であったという。

（恩田真砂美）



昭和44年度女子登山指導者研修会

登山研修所では、開所間もない昭和43年2月に、初めてのテキストとなる「積雪期研修会テキスト」を作成し、冬期の3つの研修会に使用した。執筆は、阿部和行、金坂一郎、佐伯栄治、沢村幸蔵、辰沼広吉、村木潤次郎、山崎安治、吉田勝、芳野赳夫が担当した。また、同年7月に、夏山研修会に共通する基本的な事項を取り上げて、研修を効果的に行うための資料として「夏山研修会テキスト（試案）」を作成した。執筆は、五百沢智也、加藤泰安、久米庸孝、住吉仙也、中島祥和、西丸震哉、浜野吉生、三島次郎、山崎安治、山下一夫、芳野赳夫が担当した。

また、昭和44年2月には前年度に作成した「積雪期研修会テキスト」を改訂増補し、特に積雪期登山についての必要事項を取り上げた「春・冬山研修会テキスト（試案）」を作成した。執筆は、加藤泰安、梶本徳次郎、金坂一郎、佐伯栄治、沢村幸蔵、辰沼広吉、浜野吉生、宮下秀樹、村木潤次郎、山崎安治、吉田勝、芳野赳夫、渡辺興亜が担当した。

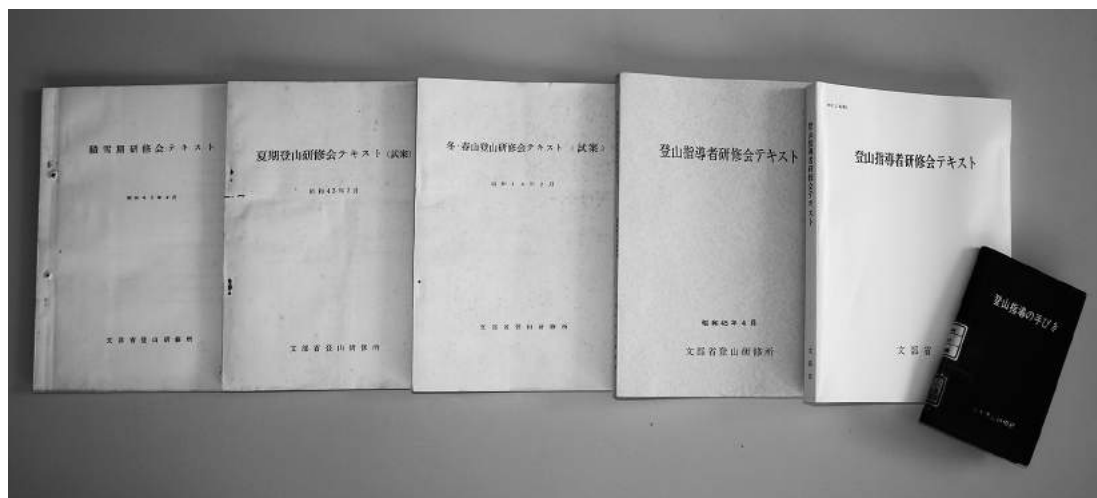
その後、研修要項（カリキュラム）が作成され、それに照らして、テキストの内容を再構成し、従来のものを1冊にまとめた「登山指導者研修テキスト」を作成した。テキスト編集に当たっては、研修要項に即し、登山の基本問題や自然科学的な基礎知識と登山技術に関するもの、また、研究協議のための課題等、広い分野にわたり登山者とし

て必要な事項を取り上げた。

その内容や執筆分担については、専門調査委員会で検討の上、それぞれの専門分野の方々に依頼した。執筆は、青木泰三、五百沢智也、石岡繁雄、石田五郎、小倉董子、加藤泰安、勝田茂、金坂一郎、久米庸孝、小森栄一、澤村幸蔵、式正英、住吉仙也、辰沼広吉、徳久球雄、中島祥和、西丸震哉、浜野吉生、広谷光一郎、深井三郎、三島次郎、宮下秀樹、村木潤次郎、山崎安治、山下一夫、吉田勝、芳野赳夫、渡辺興亜が担当した。昭和45年4月にB5版、267ページとして作成した。

このテキストは、春山・夏山・冬山の各研修会で使用されていたが、登山関係者からテキスト入手の希望が強く、テキスト改訂を機会に、その要望に応えるため、昭和48年8月にB5版263ページの市販本として発刊した。このテキストの改訂委員は、小倉董子、斎藤惇生、徳久球雄、野村哲也、松永敏郎、宮下秀樹、山崎安治が務め、執筆は、青木純一郎、池田錦重、伊藤堯、小倉董子、加藤泰安、金坂一郎、栗林一路、黒石恒、小森栄一、斎藤惇生、住吉仙也、高橋朗、辰沼広吉、徳久球雄、中島道郎、野村哲也、広谷光一郎、深井三郎、前小屋端、松永敏郎、三島次郎、宮沢清治、宮下秀樹、村井葵、村木潤次郎、山崎安治、山下一夫、芳野赳夫が担当した。

（並木 孝）



登山指導者研修会テキスト

冬季間の登山研修所

Topics

昭和50年11月、翌年に大山町（現在は富山市）極楽坂スキー場などで第31回国民体育大会スキー競技会が開催されるのを前に、常願寺川（真川）に真川大橋（241.7m）が建設された。真川大橋が架かるまで、毎年12月から4月までの5カ月間は芦峯寺から藤橋を通過して千寿ヶ原へ向かう県道立山線は、現在のようにスノーシェッドがなく、全面通行止めとなっていた。

この期間の職員は、千寿ヶ原に住む技官の佐伯



所内に設けられた給油機

正雪以外、全員富山地方鉄道を利用して通勤をした。その電車も、除雪が間に合わず運休することがあった。重油、ガソリンもこの期間搬入できないため、地下タンクを設けてガソリンスタンドと同様に給油機を使った。また、この期間は必要になったものを注文しても配達されないことから、毎年11月末になると、冬期5カ月分の文房具等をまとめ買いするために富山市内へ買出しに出掛けた。



大量の積雪に囲まれた研修所

研修会参加の学生に交通費支給

Topics

大学山岳部リーダー研修会への参加を奨励する目的で、開所から昭和44年度まで往復の交通費が支給された。昭和43年度の開催要項には、「参加者には、大学本部の所在地から登山研修所までの往復学割2等運賃（普通急行料金を含む）を支給する」と記載がある。つまり、交通費の全額支給ということである。その後、昭和45年度、昭和46年度は、片道（復路）学割運賃を支給した。

昭和47年度から昭和51年度までは、既に研修会を修了した者に参加を奨励する目的で、「参加

者には、大学本部の所在地から登山研修所までの片道（往路）学割運賃を支給する。ただし、本研修所の研修会を既に修了したことがある者については、復路の学割運賃を支給する」としている。

昭和52年度には、片道（往路）学割運賃を支給することに戻り、それ以降、支給することはなくなった。

一般山岳団体登山指導者研修会においても、参加者を増やすため、昭和47年度のみ往路の交通費を支給したことがあった。



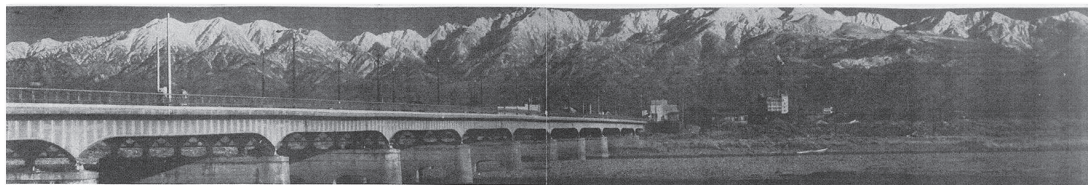
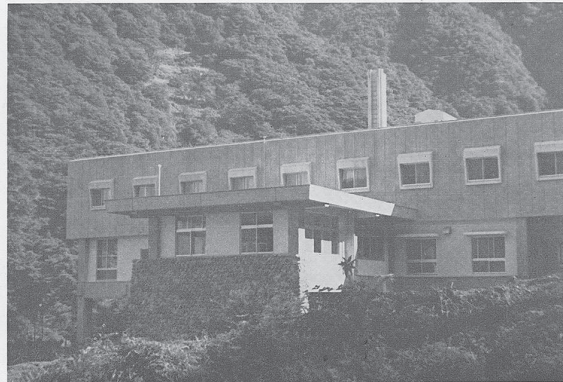
装備を借りる研修生（事務室の下にあった登山用具庫）



食事風景

文部省登山研修所

設立年月日	昭和 42 年 6 月 1 日
所 在 地	富山県中新川郡立山町千寿原
電 話	0764－ 01 (小見局)－70
	〔富山地方鉄道(粟巣野線)千寿原駅下車徒歩 2 分〕
敷 地	25,841平方メートル (7,816.7坪)
建 物 面 積	1 階 194.40 平方メートル (59坪) 2 階 777.60 平方メートル (235坪) 3 階 401.76 平方メートル (122坪) 計 1,373.76 平方メートル (416坪)
収 容 人 員	8 4 人



登山研修所のおもな事業、内容の紹介

施設所在地およびトレーニング場

1. 目的

登山研修所は、わが国における登山の健全な発達を図るため、登山指導者養成のための研修訓練を行ない、あわせて、登山に関する調査研究を行なう。

2. おもな事業

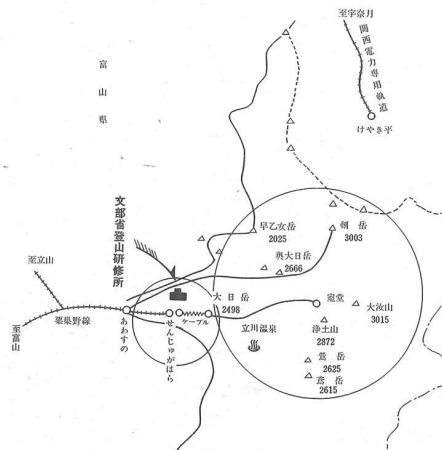
- (1) 高度の指導力をもつ登山指導者を養成するため、長期の研修会を開催する。とくに、次の3種類の研修会を中心とし、登山についての研修を行なう。
- ① 大学山部リーダー養成研修会
 - ② 高等学校の登山指導者養成研修会
 - ③ 一般山岳団体指導者養成研修会
- (2) 登山に関する技術、装備、食糧、なだれ、遭難事故等の調査研究を行なう。
- (3) 登山関係諸団体の主催する研修会に施設を提供し、それら研修会の運営について援助

3. 通音委員

登山研修所の効果的な運営を図るため、運営委員(10名)をおく。

4. 組 織

昭和42年6月1日付けで、とりあえず文部省体育局の一部として発足。
職員は所長以下7名。



開所当時の登山研修所概要